

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

富士見丘高等学校 1 年

中村 漣

課題 ③

生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会の実現に向けて。

副題

みんなの「自分らしい」を叶えたい

本文

課題番号3 「みんなの『自分らしい』を叶えたい」

「自分らしく自由に生きなさい。」

私はこの言葉を幼い頃から何度も母に言われてきました。「自分らしい」とは何なのだろう。その答えを考えるたびに、世界には戦争や貧困、生まれ育った環境によって、自分らしく生きるところか、生きることそのものに不安を抱える人々がいることに思いが至ります。自ら生き方を選ぶことができない人々の存在を思うと、平和なこの日本で、「自分らしさ」について考えられることは幸せて、ありがたいことだと感じずにはいられません。

広島・長崎への原爆投下から81年が経ちました。厚生労働省によると、被爆者の数は去年に比べて約8000人減り、平均年齢は86.7歳に上昇しています。原爆投下後の惨状は、戦争が人間らしい暮らしを一瞬で奪うことを私たちに伝えていきます。しかし、その教訓があるにもかかわらず、世界では今も、戦争や紛争が続いています。

これまでの人生の約半分を長崎で過ごした私は、実際に被爆者の方々から当時のお話を何度も伺ってきました。その生々しい経験談は、現実とは思えないほど無慈悲で恐ろしいものでした。特に忘れられないのは、被災直後の惨状だけでなく、生き残ったことのつらさを訴える声です。大切な人を亡くした悲しみや後遺症による苦しみ。「自分らしく生きる」とはかけ離れ、ただ生き延びることに精一杯の日々。私はその思いを伝えるために行動しようと心に決めました。

その後、私はイギリスに移り住むことになりました。しかし、長崎で伺ったお話が私の心から離れることはありませんでした。戦争は、人々から命だけでなく、自分らしく生きるための選択肢まで奪ってしまう。その思いを胸に過ごす中で、私は様々な背景を持つ友人と出会い、もう一つ大切なことに気付きました。それは、平和な社会であっても、互いの違いを認め合えなければ、誰もが自分らしく生きられるわけではないということです。そこで私は、「国籍、人権を超えて手を取り合おう」というメッセージを込めた壁画をデザインし、様々な背景を持つ友人たちと協力して完成させました。制作を通して互いの考えやルーツを語り合う中で、相手を知ろうとすることこそが、誰もが自分らしく生きられる社会への第一歩だと深く実感しました。

しかし、壁画を作っただけで世界が変わるわけではありません。被爆者の方々のお話と、多様な人々と共に暮らしたイギリスでの経験から、私は人々が理解し合うことこそが、誰もが自分らしく生きられる社会の土台だと考えるようになりました。安心して暮らし、大切な人と幸せに生きたいという願いは、国籍や文化を超えて共通しているはずです。だからこそ、これから長い未来を生きる私たち若者が、国や文化を越えて語り合う場が必要だと私は考えます。

その発想のきっかけとなったのは、2024 年の国連未来サミットです。若者の声を国際社会へ届ける取り組みは始まっていますが、継続的な対話の仕組みは十分とは言えません。そこで私が提案するのが、「世界ユース・ライフストーリー会議」の創設です。これは、世界中の若者が経験や思いを語り合い、理解を深めるための場です。この会議では、国連ユース事務所や、若者の声を集約する UNICEF の U-Report などの既存の仕組みを活用し、「自分らしく生きること」と、その実現を妨げる課題について世界中の若者の声を集めます。その上で、各地域の若者がオンラインで対話を行います。私が長崎で受け継いだ平和への願いを語り、他国の若者がそれぞれの経験や課題を語る。互いの声に耳を傾け合うことで、自分とは異なる立場への理解が深まり、新たな気づきが生まれるはずです。しかし、大切なのは対話を行動につなげることです。若者たちの声を提言として国連や各国政府へ届け、その後どのような取り組みや政策につながったのかを U-Report で共有します。成果を目に見える形にすることで、より多くの若者が社会づくりに参加できるようになります。

この提案は、自分らしく生きるためのきっかけにすぎません。しかし、被爆者の方々から受け継いだ平和への願いと、イギリスで学んだ多様性を認め合う大切さを、次の世代へつなぐきっかけになるはずです。私は、一人ひとりが思いを語り、互いの違いを理解し合える社会こそが、誰もが自分らしく生きられる社会だと信じています。みんなの「自分らしい」を叶えるために、私はこれからも行動を続けます。